

## 障害者総合情報ネットワークのアーカイヴィング・メソッド

塩野麻子

(立命館大学大学院先端総合学術研究科 一貫制博士課程)

### 1. 生存学研究センターに届けられた 大量の資料

2018年5月14日、立命館大学生存学研究センター客員研究員でもあるDPI日本会議の尾上浩二から、障害者総合情報ネットワーク（以下、BEGIN<sup>1)</sup>）の収集した資料が生存学研究センターへ届けられた。BEGINとは1993年から2004年にかけて、障害者の自立と政治的活動への参加のための情報収集やその発信を担った組織である。縦35cm横40cm高さ35cmの段ボール箱26箱にも及ぶ大量の資料は一つ一つ封筒におさめられており、段ボールにはその封筒が隙間なく詰められていた。これらの資料は主に1990年代から2000年代初頭にかけての、障害者に関する行政資料や関連する障害者団体の活動についてのものである。

現在、行政に関する情報は各省庁や地方自治体のウェブサイトへアクセスすれば簡単に入手することができる。しかし、1990年代初頭はインターネットがまだ十分には普及していなかった。加えて、行政資料公開の制度化は「情報公開法」が施行される2001年を待たねばならず、行政情報の入手が極めて「困難」な時代状況にあった（大塚2001: 430-1）。

BEGINが「アーカイヴ」していた資料は、そのような時代状況下のものである。

本稿は、生存学研究センターがBEGINの資料を引き継ぐにあたり、BEGINは何を目的にどのような方法で資料を収集、保管したか、BEGINの「アーカイヴ」は当時どのような意義をもっていたかについて、当時の歴史的社会的文脈をふまえつつ明らかにすることを目的とする。なお、この「アーカイヴ」がもつ現代的意義については、伊東論考、櫻井論考を参照されたい。

本稿執筆にあたって、1993年から1999年までBEGINの専従職員を務めた鎌田真和さんへのインタビューを行った。インタビューは2018年10月6日、立命館大学生存学研究センター書庫で2時間程度、半構造化面接の形で行われた。インタビュー内容の使用については、鎌

田さんより許諾をいただいている。

### 2. 障害者総合情報ネットワーク (BEGIN) とは何か

BEGINは1993年11月に設立し、2004年3月にDPI（障害者インターナショナル）日本会議と組織統合するまで、会員へ特に障害者に関わる政策やこれに関連する団体の活動についての情報提供を行った<sup>2)</sup>。

設立に際して代表世話人の二日市安は、障害者の生活に関わる施策決定に当事者が関わってこなかったがために障害者の生活のあり方が国や自治体の都合によって決定されてきたとして、次のように述べる。

「お上」にとって都合のいいそういう生活形態が持続したのは、私たちに情報が不足していたのが大きな原因でした。昔の「お上」は「よろしむべし、知らしむべからず」という原則で政治をしていたそうです。情報を独占し、「お上」に都合のいいように情報を操作するというのが、上手な政治のやり方だと信じていたのは別にヒトラーばかりではありません。そう、「お上」に情報を独占され操作されるのは、もう願い下げにしましょう。（二日市1993: 4）

設立の背景には、1981年の「国際障害者年」と1983年から1992年の「国連・障害者の十年」後の、障害者運動のあり方への模索があった（障害者総合情報ネットワーク2004: 2）。1979年に採択された「国際障害者年行動計画」は「国際障害者年」のテーマを「完全参加と平等」とし、障害当事者の政治的活動への参加が一層強く主張された（国際障害者日本推進協議会1982: 13）。鎌田さんによると、国内の障害者運動においても、従来の抗議や糾弾による運動だけでなく、当事者が主体となって政策提言をしていく、より「建設的」な働きかけを行うことが重要な課題として提起されるようになっていた<sup>3)</sup>。こうした思潮を踏まえ、DPI日本会議では運動体の再編成を試みる動きがあった。それはすなわち鎌田さんによれば、

「何か運動体とは違った」、障害者の主体的な政策提言を行うための基礎的な資料を集約していく拠点が必要ではないかという議論である。当時、行政情報入手の「困難」さは、障害当事者の政策提言を妨げる大きな障壁となっていた。BEGIN 世話人の三澤了は次のように述べ、障害者運動において情報拠点をつくることの重要性を指摘する。

行政からくる情報は、「これこれという法律が出来ました。こういうサービスを始めましたというように、できあがった形で伝えられたりすることが多いのです。ですから、はっきりと形が決まってしまう前に、できるだけ生の情報、たとえば、国がこういうことを考えているらしいとか、こういうことを委員会に諮問して新しいことをしようとしている、ということを知り、それがどういう方向をめざそうとしているのか、私たちはどう考えるのかということを考え、できるだけ政策に反映させていけるような状況を作る必要があると思います。そのためには生の情報をキャッチし、発信するシステムが必要でした。これまでそれぞれの運動団体が独自にやっていたのですが、それらのセンターとしての役割を担おうというものです。（二日市ほか 1994; 254）

こうした背景のもとに BEGIN は「情報発信」を中心とした運動組織として設立された。その目的は、設立趣意書では次のように掲げられている。

- ◆政府・各自治体などの福祉政策の動向に関して迅速かつ確かな情報の収集及び伝達を行っていきます。
- ◆障害当事者や、現場の労働者、研究者らによって、各種情報の徹底した分析・検討を行うとともに、障害者の自立と解放の立場からの法制度、政策づくりを進め、社会的に明らかにしていきます。
- ◆全国各地の障害者及びその関係者らによる様々な運動や実践に関する情報を集め、それぞれの要請に基づいて、それらを提供していきます。
- ◆地域ごとに草の根の自主的活動を続ける諸団体をネットワークし、意見や情報の交換・交流を促進していきます。

(障害者総合情報ネットワーク準備会 1993: 3)

BEGIN の情報収集やその発信は、障害者が施策決定へ参加し、自治の主体性を確立させるための活動であったことがこの設立趣意書からも読み取ることができる。

BEGIN の会員には 4 種類あった（障害者総合情報ネットワーク 1993: 5）。A 会員（会費年額 30,000 円）は、BEGIN の収集した資料の紹介などを掲載した『月刊 BEGIN』の送付、研究誌『ジョイフル・ビギン』の送付、希望する資料の提供（年間 500 枚、郵送料 3,000 円までは無料）、速報紙の送付、研究集会・シンポジウム等への参加費割引など。B 会員（会費年額 10,000 円）は、『月刊 BEGIN』の送付、研究誌『ジョイフル・ビギン』の送付、資料の提供や速報紙の送付については、希望する会員が複写費 1 枚あたり 30 円と郵送料を支払う。賛助会員（1 口 10,000 円）は団体募集のみで、B 会員に準じる。講読会員（会費年額 6,000 円）は研究誌『ジョイフル・ビギン』の送付、資料の提供については、会員が複写費 1 枚あたり 40 円と郵送料を支払う。このようなものである<sup>6)</sup>。BEGIN の活動資金は、会費と自治労などからのカンパで賄われていた。

### 3. BEGIN の活動内容

BEGIN の主な活動は、障害者に関わる資料の収集、情報紙『月刊 BEGIN』、研究情報誌『ジョイフル・ビギン』、『BOOK レット』の発行<sup>4)</sup>や、BEGIN の収集した行政資料などの会員への複写・郵送、労働組合の機関紙などの点字印刷であった。

『月刊 BEGIN』は、BEGIN がその月に入手した行政資料やこれに関連する障害者団体などの活動をめぐる資料の紹介記事や、入手資料の所蔵リストを掲載してきた。この「所蔵文書リスト」は、総番号、発行者、文書名、版型、頁数、発行年月、提供形態<sup>5)</sup>の順に記されている。会員は「所蔵文書リスト」から閲覧したい文書の番号を連絡し、BEGIN がこれに応えるかたちで複写資料の郵送などを行ってきた。

BEGIN が収集した資料は、分類をせずひとつひとつ番号のふられた封筒に入れて保管してきた。この所蔵形態について鎌田さんによると、野口悠紀雄の提唱した「超」整理法<sup>7)</sup>の影響があったという。BEGIN が立ち上がったばかりのころ、鎌田さんは資料の保管に際していかに資料を分類するかという問題に直面していた。このとき、当時のベストセラー本、野口悠紀雄の新書『「超」整理法——情報検索と発想の新システム』（中公新書、1993 年）

が資料整理の手掛かりとなった。野口悠紀雄は情報の分類は不可能であるとしたうえで、「分類せずに検索する」という斬新な情報整理法を提案していた(野口 1993)。これが、BEGIN の資料収集やこの保管においても非常に参考になったという。

資料提供を問い合わせた会員は障害者運動関係者から地方議員、研究者、「車椅子メーカー」(『月刊 BEGIN』1994.1.1, 6面)まで様々であった。鎌田さんによると、主に衆参両院の会議録や各省庁の行政資料などの提供は、堀利和参議院議員(1989-95 日本社会党 1998-2004 民主党)や石毛鏡子衆議院議員(1996-2005 民主党、2009-2012 民主党)など国会議員が中心となって行った。他方、BEGIN は各地の会員に対しても積極的な情報発信を呼びかけていた。BEGIN の情報収集・発信活動における会員の位置づけを、会員募集要項では次のように定めている。

障害者総合情報ネットワークは、皆さんからの「発信」に開かれています。配布資料も、事務局で入手した資料のみが対象ではありません。皆さんからも積極的にリクエストを出してください。また、どうぞお持ちの資料をお寄せください。ネットワークを通じて広く流通させ、共有化を図っていきませんか。「あなた」にとって有用な情報は、みんなにとってもきっと有用です。

このように、障害者総合情報ネットワークの会員は「受け手」や「利用者」とどまらず「発信者」であり「研究者」でもあるのだ、と考えています。(障害者総合情報ネットワーク準備会 1993: 4)

BEGIN の会員は単なる「情報サービス」の利用者であるだけではなく、情報の「発信者」としての役割を担うという見方は、例えば1994年2月の『月刊 BEGIN』第6号などでの「障害者の福祉のしおり」提供の呼びかけにも表れている。

ブックレット発送の際にお願いいたしました、会員の方々のお住まいの地域の自治体が発行している「障害者の福祉のしおり」のような冊子の提供について、早速お送り頂いています。ありがとうございます。先のいわゆる福祉8法の改正から、福祉施策の実施は市町村レベルに下りています。そのすべてについての情報を網羅することは、なかなか難しいことですが、できる限り各地の情報も集めて行きたいと念じています。その一つのきっかけとしての今回

のお願いです。どうぞご理解の上、ご協力をお願いいたします。(『月刊 BEGIN』1994.2.1 第6号、6面)

また、『月刊 BEGIN』の年末号では、1年間の『月刊 BEGIN』掲載の資料紹介記事や「所蔵文書リスト」などの内容を検証し、その年の障害者施策や関連する障害者運動の分析と評価を行った。

『ジョイフル・ビギン』は現代書館から出版され、書店販売も行われていた。テーマに「[われら + 障害 + 情報] 発信基地」を掲げ、障害者の生活に関わる情報を発信してきた。これら情報記事は障害当事者自身が執筆し、この点において同じく現代書館から出版されていた季刊『福祉労働』などと異なっていた。1994年8月の第1号から、DPI 日本会議との組織統合のため終刊となった2004年1月までに計19号を発行した。例えば、1995年5月に発行した第4号は「緊急特集／障害者と「阪神・淡路大震災」」としてまとめられた。この号では震災に直面した障害者の声を発信し、課題となっている障害者の生活再建を提言した<sup>7)</sup>。

『BOOK レット』は、BEGIN の収集した資料のうち、厚生労働省の主管課長会議資料や各省庁の概算要求など障害当事者が政策提言を行う基礎的資料となる最新の行政資料やこの分析記事などを収録し、会員へ提供した。2004年1月までに35号発行している。

BEGIN は他にも、DPI 日本会議などとともに障害者政策研究集会を開催するなど、障害当事者による政策研究や政策提言を掲げた精力的な活動を行ってきた。

BEGIN が2004年にDPI 日本会議と組織統合するまでに収集した資料は、2766タイトルに上る(『月刊 BEGIN』2004.3.29 第124号、7面)。

BEGIN は「ポスト障害者の十年の障害者運動」の障害当事者運動の中で、障害者に関わる様々な資料を集積し、またこれら資料を基に「情報発信」を行ってきた。すなわち BEGIN は障害当事者が政治的活動へ参加するために重要な資料の「アーカイヴ」を担った一大情報拠点であったといえるだろう。

## 5. 研究・教育機関にとっての BEGIN 収集資料の意義

BEGIN の資料収集は「当事者による政策提言」(障害

者総合情報ネットワーク 2004: 2) を基軸とした取り組みとして行われてきたが、これらの資料は研究・教育機関にとっても、特に 1990 年代から 2000 年代初頭における障害者施策や障害者運動に接近する重要な一次資料となる。『ジョイフル・ビギン』最終号 (第 19 号 2004 年 1 月) の「編集後記」は、BEGIN の活動した約 10 年間の、障害者をめぐる国や自治体の施策や障害者運動の動きを次のように振り返っている。

以来、10 年間、様々な動きがあった。主だった施策だけでも、福祉のまちづくり条例、ハートビル法、障害者プラン、市町村障害者生活支援事業、社会福祉基礎構造改革と社会福祉法、交通バリアフリー法、支援費制度等があげられる。また、阪神淡路大震災に対する救援活動、第 6 回 DPI 世界会議・札幌大会等、障害者運動にとって忘れてはならない、忘れられない出来事もあった。

目まぐるしいばかりだが、「パラダイムシフト」と呼べる程の根本的な変化にまでは至っていない。

(執筆者不明 2004: 100)

この 10 年間のディテールは描かれなければならない。そしてこれは、まさに BEGIN の「アーカイヴ」で集積された大量の資料を活用することで—これらを歴史的資料として丁寧に読み込むことで—より鮮明になる。後に続く伊東論考、櫻井論考はこうした資料活用を例示する。

さらに BEGIN の資料収集やその発信は、生存学研究センターにとっても非常に重要な意味をもつことを強調せねばならない。

生存学研究センターは、「社会の中で弱者やマイノリティとして生きざるを得ない状況におかれがちである人びとの生き抜く過程や技法に着目」(渡辺 2017: 7) する「生存学」を提言し、学際的な研究活動を展開しているが、生存学研究センターの運営するホームページ arsvi.com (<http://www.arsvi.com>) は、「生存学」に関わる情報を収集、発信している。収集、発信している情報は、「生存学」に関わりある文献や学術論文、研究者の情報から、研究会やワークショップなどイベントの案内、運動団体などの声明・抗議文まで多岐にわたる。

生存をめぐる様々な情報が集積するデータベースである arsvi.com で行われる「アーカイヴ」の活動は、実は 1990 年代から 2000 年代初頭までの BEGIN の活動と重なり合うところが多いのだ。生存学研究センターは、BEGIN の資料を引き継ぐとともに、BEGIN の「アーカイヴィン

グ・メソッド」を発展的に継承していく。

謝辞

インタビューにご協力いただいた鎌田真和氏に心から感謝いたします。また本稿の執筆にあたり認定 NPO 法人 DPI 日本会議副議長・立命館大学生存学研究センター客員研究員尾上浩二氏より事実確認及び資料提供のご協力をいただきました。この場をお借りし厚く御礼申し上げます。

[注]

1) 「BEGIN」は障害者総合情報ネットワークの略称。この略称について、『設立趣意書』では以下のように記されている。

BEGIN とは英語で「何かをはじめる」という意味で、ビギンと読みます。

BEGIN は、Basic (基本的な) Essential (重要な) & Genuine (本質的な) Information (情報) Network (つながり) の頭文字を組み合わせたものです。Basic, Essential, Genuine の 3 語で「総合」の意味を表しています(障害者総合情報ネットワーク 1993: 6)

2) BEGIN の活動については他に立岩 (1992)、杉本 (2008) を参照した。

3) 他に田中 (2005)、堀 (2014) を参照した。

4) BEGIN の発行物のうち生存学研究センターが所蔵しているものは、『月刊 BEGIN』は全て、『ジョイフル・ビギン』は 3 号以外、『BOOK レット』は 9-13、15-33、35 号である。

5) 「提供」は BEGIN が直接提供できるものを指し、「紹介」については、BEGIN が直接提供せず当該資料の発行者へ照会するものを指した。

6) 尾上さんから送られた段ボールの中に収められた資料のうち「障害者総合情報ネットワーク第 2 回総会議案書」(第 2 回総会は 1994 年 11 月 12 日新宿区立社会教育会館で開催)によると、1994 年 11 月 11 日の時点での会員の内訳は、A 会員 132 人、B 会員 204 人、賛助会員 31 団体、講読会員 30 口であった。

7) 生存学研究センターは、2012 年に『生存学研究センター報告 18 医療機器と一緒に 街で暮らすために—シンポジウム報告書 震災と停電をどう生き延びたか—福島の在宅難病患者・人工呼吸器ユーザーらを招いて—』を発行している。

[参考文献]

二日市安, 1993, 「月刊ビギン発刊にあたって」『月刊 BEGIN』(1): 4.

二日市安・三澤了・鎌田真和・斎藤明子, 1994, 「情報を発信することの大切さ—インタビュー障害者総合情報ネットワーク」『世界』(593): 254-256.

堀智久, 2014, 『障害学のアイデンティティ—日本における障害者運動の歴史から』生活書院.

国際障害者年日本推進協議会, 1982, 「国際障害者年日本推進協議会

- の発足」国際障害者年日本推進協議会編『完全参加と平等をめざして——国際障害者年のあゆみ』日本障害者リハビリテーション協会, 13-22.
- 野口悠紀雄, 1993, 『「超」整理法——情報検索と発想の新システム』中公新書.
- 大塚奈奈絵, 2001, 「電子政府と行政情報」『情報管理』44 (6): 430-40.
- 杉本章, [2001] 2008, 『障害者はどう生きてきたか——戦前・戦後障害者運動史』現代書館.
- 障害者総合情報ネットワーク事務局, 2004, 「障害者総合情報ネットワークと DPI 日本会議との組織統合の意義と課題」『ジョイフル・ビギン』19: 2-4.
- 障害者総合情報ネットワーク準備会, 1993, 『設立趣意書』: 3-6.
- 田中耕一郎, 2005, 『障害者運動と価値形成——日英の比較から』現代書館.
- 立岩真也, 1992, 「障害者ネットワーク・他——自立生活運動の現在・7」『季刊福祉労働』61:153-158.
- 渡辺克典, 2017, 「はじめに」立命館大学生存学研究センター 監修, 渡辺克典編『知のフロンティア——生存をめぐる研究の現場(知のアート・シリーズ 4)』ハーベスト社.
- 執筆者不明, 2004, 「編集後記」『ジョイフル・ビギン』19: 100.

